

ところ会 5 月行事案内

平成 27 年度、第 5 回テーマ：

東海道品川宿へ

(品川寺、坂本龍馬像、鈴ヶ森刑場跡、大森貝塚、品川歴史館)

京急北品川から鈴ヶ森までの 3.8km にわたって、江戸時代と変わらぬ道幅が「旧東海道」として残っています。

記

■日 時：平成 27 年 5 月 14 日（木）8 時 50 分集合

■集合場所：所沢駅新宿線ホーム特急券売り場前

■時間

所沢駅(8:59)⇒高田馬場⇒品川⇒北品川(10:18)

所沢帰着 17:00 頃の予定

■昼食：聚楽宴 13 時頃の予定です。

<品川宿>

品川宿の入り口の八ツ山橋から青物横丁の南端まで 2.4km が品川宿で、そこから更に鮫州、立会川、鈴ヶ森口まで合わせて 3.8km にわたって江戸時代と変わらない道幅で東海道が残っています。

<土蔵相模跡>

酒樓相模屋は高級妓楼として知られ、ナマコ壁から「土蔵相模」と通称されていました。幕末には「志士」が出入りし、文久 2 年に高杉晋作、井上馨、伊藤博文ら長州藩の志士が御殿山に建設中の英国公使館を焼き払った際には集結地となり、また、桜田門外の変決行前夜、浪士たちが別杯を交わしたのもここでした。

<品川浦 舟溜りと鯨塚>

品川宿はすぐそばが江戸の海でした。海の名残りの品川浦で屋形船を見て海を感じましょう。そして、品川浦公園でトイレ休憩も兼ねて一休みしましょう。

この公園の脇には鯨塚があります。寛政 10 年(1798 年)品川沖に迷い込んで捕らえられた鯨の供養碑です。体長 16.5m の大くじらで江戸中の評判となり 11 代将軍家斉が浜御殿（現浜離宮）で上覧するという大騒ぎになりました。

<海岸線跡>

江戸時代の海岸線は品川浦よりもっと街道に近いのです。江戸時代の海岸線には護岸のための石垣があり、それが残っています。

<伊豆の長八の鰻絵>

伊豆の長八は江戸の左官として名人であったといわれており、漆喰（しっくい）で書いた鰻絵（こてえ）は西洋のフレスコに勝るとも劣らない壁画として評価されており、伊豆には「伊豆の長八美術館」があります。その長八の作品の二つが品川にありますので善福寺の龍の鰻絵を見ましょう。

寄木（よき）神社にある天鈿女命（あめのうずめのみこと）、猿田彦の鰻絵は色彩も豊か。こちらは神社に行ってもよく見えないので、午後に行く品川歴史館でレプリカを見ましょう。



<品川神社> (東海七福神の大黒天)

北品川の鎮守、頼朝が安房国の洲崎明神を当地にお祀りしたのを創始とします。室町時代中頃には太田道灌が素盞鳴尊を祀った。また、徳川家康は関ヶ原合戦出陣の際に当社にて戦勝を祈願し、以降、徳川歴代将軍により庇護を受けました。

【品川富士（富士塚）】：品川神社境内には富士山を信仰する北品川・丸嘉講が明治 2 年に築いた富士塚があります。

【一粒万倍（いちりゅうまんばい）の泉】：この泉の水でお金を洗うと一粒が万倍に増えるといわれ人気です。お金や印鑑を洗ったり、この水を持ち帰ってお店や家の入口、四隅に注いだりすると商売繁盛するなどもいわれています。

【板垣退助の墓】

品川神社の裏手には板垣退助の墓が夫人の墓と並んで建っています。傍らには、刺客に襲われた際に言ったと伝えられてる有



名な言葉「板垣死すとも自由は死せず」が刻まれた石碑が建っている。佐藤栄作元総理の筆です。でも、実は板垣が言った言葉ではないようですよ。

<本陣跡>

本陣のあった場所ですが、明治天皇が休息されたので名称は聖蹟公園となっています。(通り道でないので割愛します)

<稼穡(かしよ)稲荷のイチョウ>

かつてこのあたりは薩摩藩島津家の抱屋敷で、稼穡稲荷はその屋敷内に祀られていたものです。

稼穡稲荷社の神木として保護されている大きな銀杏は、樹齢5~600年と推定され幹周り4.1m、高さ23m、の見事なもので、品川区指定天然記念物です。



<荏原神社> (東海七福神の恵比寿)

和銅2年(709年)の創建、元品川宿の総鎮守。家康公より神領を寄進され、歴代将軍より庇護を受ける。東京遷都の際には、明治天皇の内待所となり、菊花御紋章を賜る。

古くは貴船社、品川大明神等と称していましたが、旧荏原郡(品川、大田、目黒、世田谷)の中で最も由緒のある神社であったことから、明治8年、荏原神社と改称しました。神殿に掲げる荏原神社の扁額は、内大臣三条実美公の筆です。

源頼義・義家は奥州安倍氏征伐(前九年の役1051~1062年)に際し当社と大國魂神社に参籠し、品川の海中で身を浄めました。このことより、江戸時代には、毎年4月25日に神官、神馬の一行が早朝、府中を立ち、現在の荏原神社に来て、天王洲の海で禊ぎをして汐を汲み、その日のうちに府中に戻っています。府中には「品川道」と呼ばれている道が残っており、現在でも大國魂神社の神職は例祭のくらやみ祭に際し荏原神社に参詣して禊を行います。

<旅籠屋釜屋跡> 新撰組の定宿だった。

東海道を上り下りする人々はここで休息したり、見送りや出迎えの人たちと宴会を開いたりしました。大変繁盛したので後に本陣同様の門構えにし、連日幕府関係者が宿泊した記録が残っています。明治元年(1868年)1月には、鳥羽伏見の戦いに敗れた土方歳三を始めとする新撰組隊士たちは品川に上陸し、しばらく釜屋に滞在しました。

<品川寺> (東海七福神の毘沙門天)

品川寺(ほんせんじ)は弘法大師を開山とし品川宿の寺院の中では最も古く、大同年間(806-810年)に創建されたといわれます。太田道灌により伽藍が建てられ大円寺と称しましたが、その後、承応元年(1652年)に再興され、現在の品川寺となりました。寺宝の大梵鐘から「鐘の寺」と呼ばれている。江戸三十三箇所観音霊場の第31番です。



【銅造地藏菩薩坐像】: 東京都指定有形文化財(彫刻)

山門前左手にある露座の仏像。江戸六地藏^{*1}の第一番。江戸六地藏は露座の地藏だからか、笠をかぶっているが唯一頭上に傘を載せていない。

※1 江戸六地藏: 江戸の出入口6箇所(東海道:品川、奥州街道:浅草、甲州街道:新宿、中山道:巢鴨、水戸街道:白河、千葉街道:富岡)に丈六の地藏菩薩坐像が造立された。

- ・富岡(門前仲町)の永代寺は廃仏毀釈によって取り壊された。
- ・ウィキペディアでは中山道は巢鴨の眞性寺となっているが2014年5月の谷根千の回に行った浄光寺(雪見寺)の山門を潜って左手に高さ1丈(約3m)の「銅造地藏菩薩像」があり、江戸六地藏の一つとされていたと説明があった。そこで、調べてみると江戸六地藏は「始の六地藏」と「後の六地藏」があり、浄光寺は「始の六地藏」ということでした。
- ・白河霊巖寺、中に入らず素通りしてしまいましたが深川七福神の時に清澄庭園から次に行く途中にあった松平定信の墓がある寺です。

【梵鐘】: 明暦3年(1657年)の銘があり、徳川家綱の寄進とされる。鐘身に六観音像を鑄出する。この鐘は幕末に海外へ流出し、ジュネーヴ

の美術館に所蔵されていることが分かり返還交渉をした。ジュネーヴ市議会は鐘を日本へ戻す決定をし、品川寺に返還された。

その後、品川区とジュネーヴ市は友好都市となっている。



【品川寺のイチョウ】: 品川区指定天然記念物

推定樹齢600年、幹周り5.35m、高さ約25mの大木です。



ジュネーヴ市より帰還の品川寺梵鐘

<坂本龍馬像>

ペリーが浦賀に来た頃、坂本龍馬は浜川砲台の警備にあたっていました。時に竜馬は20歳。これを記念して立会川駅の傍に龍馬像が作られました。

<聚楽宴> 昼食

場所：立会川駅前、品川区東大井2-23-1 電話03-3764-8915

料理：当会指定のオリジナルコース料理(5品)：1,300円

飲物：ビール(中瓶)525円、生ビール(中)472円、酒(上善如水)578円、ソフトドリンク210円、ワイン390円 各自で
昼食後に約3kmの行程が残っていますので、ほどほどにね。

<浜川橋・泪橋>

東海道の立会川に架けられている浜川橋は、鈴ヶ森の刑場で処刑される罪人が護送される時、その親族たちが密かにここまで見送ってきて、この橋を最後に、涙で別れたことから泪橋といわれるようになりました。

<浜川砲台跡・土佐藩鮫洲抱屋敷跡>

浜川橋(泪橋)から立会川が海にそそぐ所の869坪が土佐藩の抱屋敷でした。抱屋敷とは幕府からの拝領ではなく、買入または借用したものの意。ここは土佐から送られてくる物資の荷揚げ地で、ペリー来航の翌年土佐藩はここに砲台を作りました。若き日の坂本龍馬も警備陣に加わっており、約200m離れた土佐藩下屋敷から通っていました。

<鈴ヶ森刑場跡>

鈴ヶ森刑場は、江戸時代には、江戸の北の入口(日光街道)沿いに設置されていた小塚原刑場とともに、南の入口(東海道)沿いに設置されていた刑場でした。元々この付近は海岸線の近くにあった1本の老松にちなんで「一本松」と呼ばれていましたが、この近くにある鈴ヶ森八幡(現磐井神社)の社に鈴石(振ったりすると音がする酸化鉄の一種)があったため、いつの頃からか「鈴ヶ森」と呼ばれるようになったといわれています。

1651年(慶安4年)に開設され1871年(明治4年)に閉鎖される間に10万人から20万人もの罪人が処刑されたと言われています。刑場設置当時は浪人が増加し、それにともない浪人による犯罪件数も急増していたこ



とから、江戸に入る人たち、とくに浪人たちに警告を与える意味でこの場所に設置したのだと考えられています。

最初の処刑者は慶安の変(由比正雪の乱)の首謀者のひとり丸橋忠弥であるとされています。忠弥は町奉行によって寝込みを襲われた際に死んだが、改めて磔刑にされた。その後も、平井権八や天一坊、八百屋お七、白木屋お駒(白子屋お熊)といった人物がここで処刑されました。

<大井の水神>

ここの池に湧き出していた地下水は柳の清水と呼ばれ、村民が飲用や水田耕作に利用していました。また歯痛を止める利益があるといわれています。大井村の村民が、貞享2年(1685)にここに祠を建てて九頭龍権現を祀り、明治以降に祭神は水葉女命(みずはのめのみこと)に変わりました。また、昭和50年に湧水が枯渇し、現在は湧水をポンプで汲み上げています。

<品川区立品川歴史館>

品川歴史館は、郷土資料の保存と活用、区民文化の向上を目的に1985年(昭和60年)に開館しました。日本考古学発祥の地といわれる大森貝塚と、東海道第一の宿場として栄えた品川宿を中心にした常設展示では、原始・古代から現代にいたるまでの品川の歴史を学ぶことができます。また、日本庭園を望む書院を備えており、茶道など伝統的文化活動の場としても利用されています。

元々建設地には昭和初期に安田財閥系の安田善助の邸宅として建てられた書院造の屋敷が建っており、茶室と庭園の大部分をそのままの形で残しています。

観覧料：一般100円、団体80円、70歳以上無料(会の費用で払います)

【常設展示】：「大森貝塚とモース博士」、「東海道と品川宿」の2つを柱とし、原始古代から現在までを展示。ロビーのパソコンでは所蔵する「浮世絵」の検索が可能。

・第1展示室 - 原始古代から江戸時代まで。縄文土器、弥生土器、人物埴輪の展示。また、江戸時代の農業や漁業の解説や器具等の展示、品川用水の模型、品川宿の賑わいなどを模型にて紹介。

・第2展示室 - 明治以降からの資料や出土した花瓶や戦時下の暮らしの様子、空襲で溶けたガラスなどを展示。

【庭園】：溪流を模した流れが2本と、四季折々の草木が配された芝生庭園。歴史館建設中に敷地内で発見された水琴窟が修復・再現されている。

<大森貝塚>

大森貝塚は、東京都品川区から大田区にまたがる縄文時代後期から末期の貝塚。

明治10年アメリカ人の動物学者・エドワード・S・モースが、横浜から新橋へ向かう途中、大森駅を過ぎてから直ぐの崖に貝殻が積み重なっているのを列車の窓から発見し、発掘調査を行った。

昭和30年には、国の史跡に指定された。モースらの発掘した貝殻、土器、土偶、石斧、石鏃、鹿・鯨の骨片、人骨片などの出土品は東京大学に保管されており、全て国の重要文化財に指定されている。

【モースと小シーボルト】

大森貝塚の発掘には、モースの他に、長崎に鳴滝塾を作ったシーボルトの次男ハインリッヒ・フォン・シーボルトが関わっている。ハインリッヒは考古学に精通していたが、学者ではなく外交官（通訳官）であり、モースと第一発見者の功を争った。ちなみに、日本において考古学という言葉を使い始めたのはこのハインリッヒが出版した「考古説略」が始めであることは余り知られていない。

【時代背景】

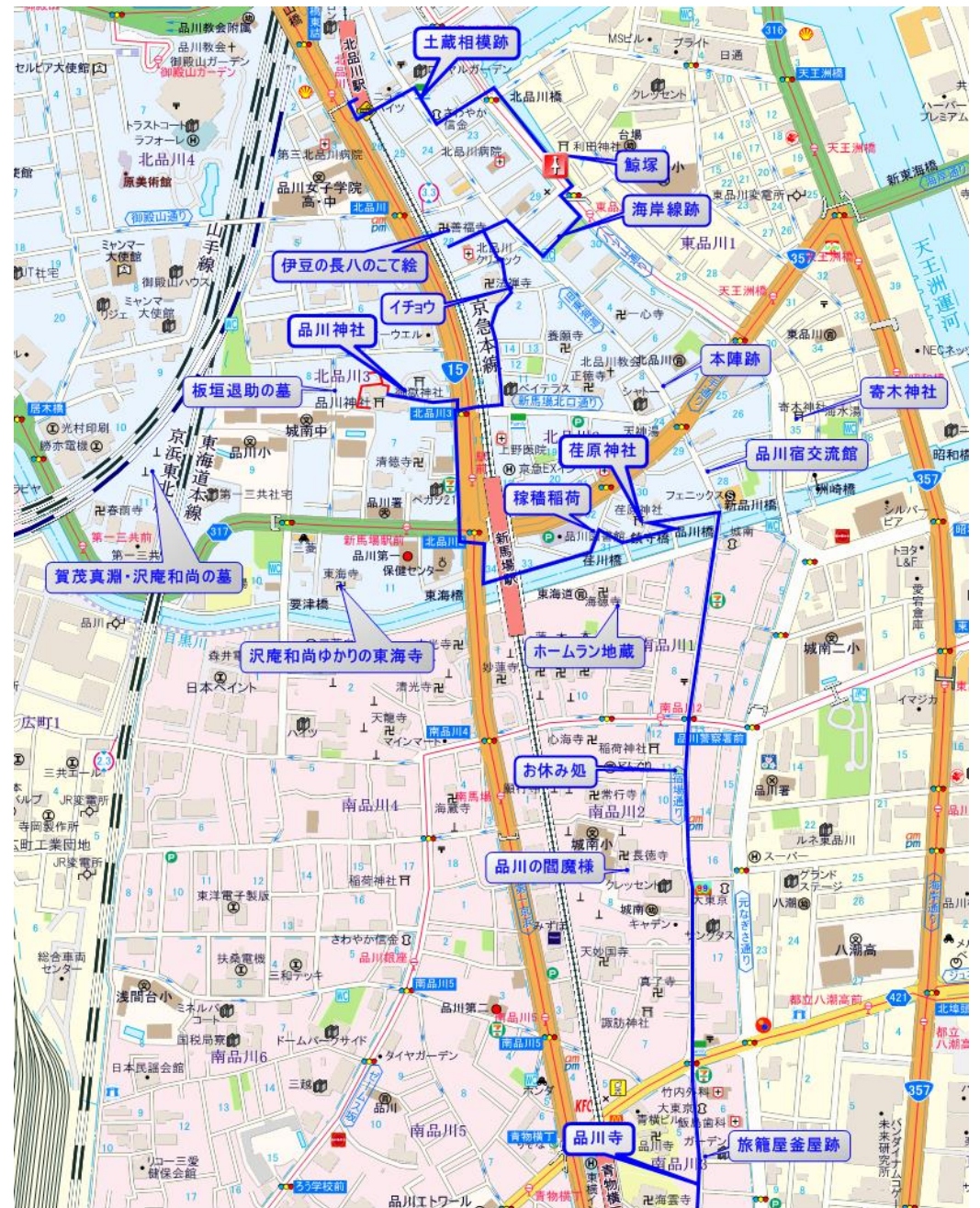
縄文時代後期は寒冷化に伴う環境の変化により、木の実、動物などの食料が減少した時代である。さらに東京、神奈川一帯では箱根山の噴火や富士山の噴火が長期化したため食料の確保が難しくなり、それに伴い急激な人口減少が起きている。そのため東京、神奈川では縄文時代晩期の遺跡はほとんど見当たらない。その際、寒冷化に伴う食料資源の減少が少ない海産物を中心に食料の確保をしたため、この貝塚ができたと言われる。

【2つの大森貝塚】

大森貝塚に関する石碑は大森貝塚遺跡庭園（品川区）とNTTデータ大森山王ビル横（大田区）の2箇所にある。モースがその場所の詳細を書かなかったので、発掘地点について長い間、品川区説と大田区説の2つが存在した。現在ではモースが調査したのは品川区側であったことが分かっているが石碑は2つ残っている。

◆参考資料：品川宿観光ブック

http://tokaido-shinagawasyuku.com/shinagawa_ebook.pdf



品川宿主要部マップ